
二人の主人公の物語

鄙野 紫乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の主人公の物語

【Nコード】

N7584X

【作者名】

鄙野 紫乃

【あらすじ】

高次元化学物質 α 。それは、加熱されることで β エネルギーを生む、一つにして永遠に存在する永久機関。永遠に得られるエネルギーと共に栄華を極めた人類は、しかし α によって齎される β エネルギーとは別のもう一つの存在によって栄華の頂点から転がり落ちる歪線 γ 。歪線 γ によって生まれた“次元の裂け目”。それは、無限に増え続けるエネルギーのために生まれる歪。そして、次元の裂け目から次元を超えた異界の地球外生命体が、突如として地球の侵略を始めた。人類は抵抗の末に敗北し、彼ら異界の類人に隷属するこ

となる。謎の力を操る異界の類人に力及ばない人類は、彼らに隷属し、奴隷として扱われる。 終わりを迎えた人類の繁栄の果てに訪れた絶望。そんな中、一人の少年は力を与えられ、また一人の少女は力を得る。これは物語。一人の英雄と、一人の救世主。二人の主人公の、物語。

0話 プロローグ

世界は冷たかった。

「おら働け！そのやつ休んでんじゃねえぞ！」

誰に対してでなく、誰がというわけでもなく。

「ああん？なんだその面は！」

ただ、世界は冷たかった。

「なに、笑ってやがる？さっさと働け！」

だから、僕は――

2055年、4月の事。

高い空には、青い青い空。

空にある、青い、青い、空。

少年は、ボロを身に纏っただけの少年は。

周囲の自分と同様に働く少年少女の中で、ひととき目立つこともなく。

「やくそくのじかんまで、

あとすこし。

そしたらちからをかってね」

空に浮かぶ“地球の青”を眺めながら、笑った。

一方、どことは知らない深い森の中。

赤に輝く半月と、それより少し小さな青い三日月。

二つの月を内包するように背後に輝く、緑の満月に照らされた森の中。

そう、3つの月に照らされた、地球ではないどこか。

その森の中の一角に建てられた、小さな小屋で。

「行くのかい？」

一人の老婆が、話しかける。

「うん、私は、“にんげん”だから」

話しかけられた少女は、そう答えた。

14歳といった、幼さの残るまったく少女といった風体の“にんげん”の少女。

しかし、少女に話しかけた老婆は違った。

黒の絹のローブに身をすっぽり隠しているとはいえ、明らかに人よりながい耳に、

深海のそれより、なお深い蒼い瞳で少女を見つめ、柔らかな微笑を浮かべていた。

「・・・ありがとう。育ててくれて。

でも、私、いきたい」

「ここで、わしと一緒に生きてはくれんのかい？」

「ううん、それでもよかったの。けど、私は知ったから。」

“にんげん”が、地球でどうなっているかを知っちゃったから。

だから、いきたい。

私は、みんなを救うために、地球に行きたい、そして、そのために生きたい」

長い黒髪を森の風に靡かせた日本人の少女は、各個たる意識を持ったその黒の瞳で応える。

「そうかい。なら、行っておいで。」

でも出来たら、帰ってきて、欲しいねえ」

「あはは・・・考えとくね。」

じゃ、行ってきます、マスター・ゼノン」

「ああ、行つておいで。」

そして、ナユキ、あなたの望むままに、生きておいで」

2045年、地球。

文化文明の絶頂を極め、人類の栄華は超常に達した。

全ての人間が飢えることなく。

全ての人間が憂ることなく。

滅ぶことなく、資源を枯渇させることなく、繁栄していた。

枯渇寸前まで追い込まれた地球資源エネルギーに替わる、新エネルギー！。

高次元化学物質「 α 《アルファ》」。

化学物質 α 《アルファ》が過熱を受けることで得られる電磁熱エネルギー「 β 《ベータ》」。

α 《アルファ》と β 《ベータ》の存在により、人類はかつてない力を手に入れた。

経済革命、産業革命を超える、発展革命。

高次元化学物質 α 《アルファ》の特徴は、

α 《アルファ》を加熱した際に使われるエネルギーの総量よりも、取得される β 《ベータ》エネルギーの総量の方が多いことである。

質量保存の法則を打ち壊す、謎の化学物質。

得られる β 《ベータ》エネルギーを α 《アルファ》の過熱のために用いることで、より多くの β 《ベータ》エネルギーが得られる。

その存在をして、一つの永久機関。

そしてなにより、この高次元化学物質 α 《アルファ》が“高次元”などと称される理由がある。

“この謎の化学物質 α 《アルファ》は、加熱後に一定時間放置することで、一固体の α 《アルファ》のみで元の状態に復元する”

つまり、加熱後に β 《ベータ》エネルギーを取得後、使われた α 《アルファ》を真空状態で放置することで、

加熱によって失われた α 《アルファ》自体の堆積が、復元するのだ。

理論上、この自己生成とも自己再生ともいえる事象はあり得ない。

しかし、この謎の物質 α 《アルファ》を人類は発見し、その使い道を見出した。

再現なく、どれだけ消費しても得られる β 《ベータ》エネルギー。

失われない資源。

失うことのないエネルギー！。

人類は、高次元化学物質 α 《アルファ》と β 《ベータ》エネルギーによって進歩を重ねた。

その果てに、極めた。

文化・文明の極地に至った。

が、人類は気付かない。

上り詰めた山は、下るしかないことを。

それは無理もないことであり、当然のことでもある。

無限のように得られるエネルギーは、人類が望まぬものを齎した。
もたら

認知外歪線 にんちがいはいせん
Y 《ガンマ》

β《ベータ》エネルギーの消費によって発生する不可視、無味無臭な計測不可能物体。

観測不能なそれは、β《ベータ》エネルギーの消費されたあらゆる場所、いかなる用途に限らず、

発生後、特定の場所に集合し、融合し、肥大化する。

その特定の場所とは、日本の最西端の島、与那国島。

やがて、歪線γ《ガンマ》は巨大化し、

ついには目に見えるはずのなかったそれは、すべての人類によって視認できるものとなる。

それを観測した人類は、恐怖し、畏怖した。

“次元の裂け目”

歪線 γ 《ガンマ》の集合体は、端的にそう言い表せるものである。

なぜそれが現れたのか、どうしてそこに現れるのか。

人類は理解することができない。

なぜなら、歪線Y《ガンマ》の存在を認識できないから。

なぜなら、歪線Y《ガンマ》の存在を解析できないから。

日に日に巨大化していく“次元の裂け目”に人類が恐々とする中。

ついにその日は訪れる。

2047年、7月7日。

“次元の裂け目”からの、突然の生体反応。

裂け目より、異形の者たちの出現。

そして、それら異形を操る類人種が存在。

裂け目から現れた謎の生命体たちは、裂け目から地球に渡ると同時に地球の侵略を始めた。

その数、100の異形種に、20の類人種。

これらに対し、世界各国は共同で戦力を持ち出し、応戦。

その戦力、全世界の10分の1。

こうして始まった第3次世界大戦は、奇しくも1次2次とは違い、人類と地球外生命体との戦争であった。

結果、人類はその戦力の半分を失い、これに勝つ。

だが、

2048年、2月21日。

地球外生命体、来襲。

その数、2500の異業種、500の類人種。

前回に比べ、あまりの大多数の出現に、全世界が一丸となってこれにあたる。

投入戦力、地球規模全体の持ちうるすべての戦力。

結果、敗北。

たった3000の地球外生命体に、全人口200億を超える人類は敗北した。

人類は異界の類人種に敗れ、彼らに全面降伏。

異界の類人種、セルダン族は地球に属するすべての人間の降伏を受諾。

以降、人類はセルダン族の類人種に隷属することとなる。

こうして、人類は栄華の極みから突き落とされ、異界の人種に隷属することとなった。

これは、二人の主人公の物語。

終末を迎えた地球で奴隷のごとく扱われる人類を救うために立ち上

がる。

一人の英雄と、一人の救世主の物語。

1話 英雄

少年に名前はない。

親はいない、兄弟もいない。

いや、いるのかもしれないけれど、みたことはない。

少年は、生まれた時から一人であった。

いや、一人というには語弊がある。

彼が、生まれて、一度でも一人だったことはない。

彼の周りには、常に同年代の少年少女が何人もいた。

彼と同じように、名も知らぬ、親も知らぬ子供たち。

彼らは今、セルダン族の経営するとある場所の奴隷として働かされている。

生まれた時から収容されていた牢獄という箱庭の中で、

まともな教育、まともな環境を得られずに、生きている。

わずかに言葉がわかる程度の知識、そして社会から隔絶された世界。

唯々諸々と異界の侵略者に虐げられる日常が、当然だと受け入れている。

そう、たった一人の、彼以外の子供たちは。

彼だけは違う。

彼にとっては不運にも、人類にとっては幸運にも。

彼だけは、違ったのだ。

「おい、そこのお前」

ふと、彼は自分と同じように働いている他の子供に話しかけられる。

「なに？」

振り向くと、薄い茶髪の少年がいた。

「お前、あんまりぼーっとしてるなよ。」

俺たちまで怒られるんだぞ」

「いめん」

「・・・次から気をつけろよ」

そういうと、少年は自分の作業に移った。

彼らは今、屋内にて家畜の身体を洗っている。

彼らは、牛の身体を洗っているのだ。

セルダン族の人々が経営する牧場の奴隷として働いているのである。

数十人の子供たちが、自分と同じようにホースを握り、牛の身体を洗っている。

高級牛であるらしいその牛たちの肉を、セルダン族の人々は好んだ。

故に、彼らは進んで牧場経営に乗り出した。

ただ、情報社会としてどこにでも牧場経営の上方を入手できる地球において、

ある程度の知識、常識、道徳などを持っている大人の奴隷は邪魔でしかなかった。

よって彼らは、生後わずかばかりの地球人の子供を買い、労働力として扱っている。

牧場はそれなりに儲けているのか、規模がかなり大きい。

「よし、ガキども、牛を外へ連れていけ！」

セルダン族の男が指示を出す。

子供たちはその指示に従い、首輪につながれた牛をゆっくりと引っ張り、屋内から連れ出す。

ンモー、という牛たちの低い鳴き声と共に外へ。

明るい日差しの指す、外へ出た。

蒼い、晴天。

「ガキどもー！牛を放したら飯の時間だー！」

雲一つない晴れ空の下、

その声に従い、子供たちが先ほど来た道に戻り、屋内へと戻っていく。

だが、少年は空を見あげていた。

「・・・」

高い蒼天を見あげ、わずかに頬を綻ばせる。

「おい、行くぞ！」

そこを、例の薄い茶髪の少年に引っ張られた。

彼はわずかに姿勢を乱されながら、しかし、何も言わない。

茶髪の少年は、そんな様子の彼をもう一度引っ張り、ともに屋内へと戻っていった。

彼らの背後で、青空が、キラリと一瞬光った。

「そういや、お前、そろそろか？」

「うん あと 5日 かな」

「そうか、5日か・・・いいなあ・・・俺なんてあと半年は先だぜ」

子供たちは、みな食堂でお昼ごはんを食べている。

昼ごはんはコッペパンと、牛乳と、野菜のサラダ。

毎日三食、このような組み合わせであるが、野菜の組み合わせは季節ごとに異なる。

朝ごはんでは、一人に一個ずつニワトリの卵も与えられ、栄養分は多少は配慮されている。

それも、奴隷とはいえ、地球人の子供一人の値段が高いからだ、

一人の子供を買うよりも、身体を壊さない程度に食事を与えた方が経済的なのだ。

なにせ、エネルギーに不足はないのだから。

無限のエネルギーを前に、食糧不足は起こらない。

「いいよなー。」

お前、どれにするつもりなんだ？」

「1日の休暇だよ」

「まじで？勿体ねー！」

茶髪の少年が、分かつちゃいねえな！とでも言いたげに頭をガシガシと掻きまぐる。

「せっかくの、“誕生日”なんだぜ！？」

そう、この牧場では、1年に一度、つまり誕生日を祝ってもらえるのだ。

これは、地球全土での奴隷の状況を考えれば、破格といってもいい好待遇である。

このような制度を実施するのも、この牧場の経営主のセルダン族の大人が、家族内で自分の子供の誕生日を祝うのが好きで、

奴隷とはいえ、子供たちのストレスの発散のために、あるいは希望のために、祝ってあげているのだ。

この牧場において、奴隷の子供たちは自分の誕生日にいくつかの選択の中から選んで受け取れるのである。

一つ、1日の休暇。

一つ、肉や魚を使った料理。

一つ、日本語で書かれた本。

この3つの選択肢から1つを選ぶことができるのだ。

そして、彼は5日後の自分の誕生日に、1日の休暇を貰うことを管理人に伝えてあるのだ。

管理人とは、彼らの体調などの状況を管理しているセルダン族の大人のことである。

「いいなーいいなー」

「きみ も また はんとし で」

「まあ、そうなんだけどさー・・・はあ・・・。

で、その休暇で何をするわけ？」

「ひみつ」

「秘密って・・・まあ、いいけど・・・。」

「きみ は きよねん は なに を ？」

「俺？オレは本だぜ！

昔べすとせらーをとったってやつ！すっげえ面白いんだ！

毎日何度も夜に読み返してるんだけど、何度読んでも飽きないんだよ、これが！

で、内容が・・・」

そして、茶髪の少年は、お昼ごはんの時間が終わるまで、延々とその本の内容を語った。

――5日後。

彼は、牛の放牧されている牧場を、一人散歩していた。

今日が彼の誕生日なのだ。

誕生日といっても、彼が牧場経営主のセルダン族に買われた日、なのであるが。

彼は一人、ずんずんと歩いていき、やがて牛以外の誰にも見えないところに到達する。

監視の眼は、ここまで届いていない。

セルダン族の大人たちが無警戒になっている理由は、

いま、彼の手首に巻かれているリストバンドのようなものがあるからだ。

GPS機能付きで特定範囲外に出るとセルダン族の方で警報が鳴り、

軽い電気ショックと共に身に着けている人間を気絶させる道具である。

脱走しようとしても、この道具がある限り、子供たちは牧場から出られないのである。

「やくそく」

ふと、少年が彼以外誰もいない場所で話し出す。

「やくそくの じかん だよ」

その言葉に答えるように、空のある一点が、一瞬光る。

「ちから を」

その言葉に応えるように、彼の目の前の空間が歪みだす。

「かして」

彼が、目の前の歪んだ空間に、右手を突き込む。

すると、彼の右手は外からでは肘から先が存在していないかのように見える。

しかし、実際に手が見えないだけで、彼の手は存在している。

彼は、何かを手探りのように探し、そして、

「よいしょ」

抜き出すと、そこには、

白と、

灰色と、

黒が混じり合った、

直径5.6cmの大きな球体。

艶があり、わずかに光沢のあるそれは、大理石の球体^{ボール}。

彼が、唯一生まれた時から持っている物だ。

彼自身に、なぜそれがそこにあって、なぜそこから取り出せるのか、

そういった“理由”は一切理解していない。

しかし、できるものは、できる。

彼は右手にあるその大理石を一撫でし、

唱える。

『王命に従い、理想の礎となれ。』

我が声に呼応し、ただ、敵を殲滅する剣と為れ。

其の王の名に従い、其の輝きを以て力を示せ』

少年が右手を天に突き上げ、大理石が輝く。

『救世の剣よ、王の手に来たれ！』

いま、時は満たされた！

其の力を我に宿し、仇敵を散らす柱となれ！』

蒼天が輝きに呼応し、天から光が降り注ぐ。

『我に力を！』

救国の王剣！

其の名は蒼^{カリバーン}天に輝く剣の星！』

——その日、一人の英雄が降臨した。

かつてブリテンを救いし、騎士の中の騎士が求めた理想のために振るわれた剣。

幼き少年の身にして、救国の人柱となった英雄を選定した、英国の

神具。

少年はその日、2055年4月17日。

彼の右手には、

空のように澄み渡った青色で、

けれどもどこまでも深い蒼色で輝く刀身を持った、

金と銀で装飾された剣が握られていた。

そして、救世の英雄は、剣を掲げた。

この地球を、人々を、理想の国を、取り戻すために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7584x/>

二人の主人公の物語

2011年10月21日11時03分発行